

校長研修だより8

「深い学び」とは 2021・5・18 重枝 一郎

生徒の思考を高め、深い学びに導く上で最も重視するのが、洞察を促す「問い」である。一般的に「AならばBである」は順思考と呼ばれ、それを深く吟味したり、多様な観点から解釈するプロセスが失われたりすることがある。そうならない「問い」で思考を深めていかななくてはならない。

「問い」の代表的な形式は「～にもかかわらず、〇〇なのはどうか」。例えば、国語の教材によく取り上げられる「羅生門」では、「芥川龍之介は大正期の作家であるにもかかわらず、なぜ小説の舞台に平安時代を選んだのか？」という問いによって創作動機を深掘りすることができる。ただのスキルの習得でなく、本質を考える上で効果的である。他にも、「〇〇ということは知っていますね。ところで、そもそも〇〇は何のためにあるのでしょうか？」。この問いかけは、物事の本質や根源的な意味を問い直すときに効果的である。例えば、「18歳以上の人に選挙権が与えられました。ところで、そもそも選挙制度にはどんな意味があるのでしょうか？」のような問いになる。また、「〇〇といった状況があります。そこで改良してみたいのですが、どんなことが考えられますか？」。この問いかけは、どんなところに問題があるのかという問いを前提として含んでいる。

また、逆説的問いかけは、よく行う形式である。「この場合、なぜそうでなければならぬのか？」という問いかけである。これは洞察を促し、とても効果的である。そして、「もしそうでないなら (if not), どうなるでしょうか？」という問いかけは、既存のことだけではなく、新たに生み出したり、比較検討したりするものになる。最近の入試でもこのような問いかけの問題があり、自分の考えを記述する。つまり、生徒がもっている知識をもとに肯定的に思考が働く状況をつくり、思考を深めていくことを促していくことが入試対策にもつながる。

■ 6, 7, 8号のおわりに

お分かりだと思うが、6, 7, 8号は「主体的・対話的で深い学び」からの話である。

主体的に学習する「アクティブ・ラーナーの育成」は、本校においても重点目標の一つになる。世の中の的にも、そうした流れで教育改革が進められている。そして、そこに問われているのは、私たち教師の意識の改革になる。「教師＝教える役割」から脱し、教師自らまず率先してアクティブ・ラーナーになるという意識が必要となる。それは、地産地消の校内研修等、現場主導で主体性を重視した学びのコミュニティをどんどん創っていくことが、アクティブ・ラーナーの育成になると考えている。そのプロセスからアクティブ・ラーナーが生まれると思っている。今の教育改革の激流にただ流されて、飲み込まれないためにも、私たちはアクティブ・ラーナーでなければならない。

AL「主体的・対話的で深い学び」

ミッションAL「ゴールを示しながら，思考を放棄・停止させずに，チャレンジさせる」

授業の積み上げの循環

